

教育新報

新大教育学部同窓会
第 166 号

発行人 安 達 徹
事務局 新潟大学

教育学部内

TEL(025)263-6760

印刷所 (株) 文 久 堂



これまで そして これから

教育学部同窓会副会長 宮川由美子

周囲を引きつけるあの瑞々しい感性は、どうしたら身に付けることができのだろうと、お会いするたびに思ってしまう滝澤かほる先生。その滝澤先生を講師にお迎えして、「第四回同窓生の集い」が開かれました。

「ギムナストラダ」体操への道」と題して、これまで研究してこられた「リズム体操」を主軸に、競技性を持たないスポーツの可能性や自分と体操との関わり、新潟大学三十四年間の振り返りをお話しくださいました。私の中で最も印象的だったのは、滝澤先生の目が、常に世界を見つめていらしたことです。日本のギムナストラダの先駆者として、日本と世界とを繋げてくださったのです。

「人との出会いを大切に」「チャンスは逃さない」など、これから生きる私たちにおくってくださいました。

「同窓会の歴史」が、同窓生の皆さまのお手元に届いたことと思います。

これまで、同窓会としてのまとまった記録が残っていないため、誤りがあるかもしれません。そこで、安達徹同窓会長は、「先輩の皆さまから、誤りを正していただきたい」としています。

沿革を見ますと、昭和二十四年の開校後、七年の時を経て同窓会が発足しています。私自身は高田分校で学びましたので、五十嵐キャンパスは、現職になって初めて足を踏み入れました。

その五十嵐キャンパスも歴史を刻み、同窓会も六十年を積み重ねました。「新潟大学教育学部の修卒生であることを誇りに思い、教育界の発展に寄与し、我々の親睦を深めていこう」と、同窓会のこれからの思いを馳せる安達会長に、ささやかな力を寄せていきたいと考えている私です。

この年末、中国の広州市と珠海市の小学校を視察する機会を得ました。これまでの私にとって、中国という国はとても遠い国でした。おそらく、生涯、訪ねることなどないと思っていた国でした。

理由は幾つかあります。生活様式の違い、考え方の違い等々。ただ、食いしん坊の私ですので、本場の「中華料理」だけは、「食べてみたい」筆頭でしたけれど・・・。

実際に、自分の目で見て触れて経験した中国は、「見ると聞くでは大違い」そのものでした。

何より、「ほとばしるようなエネルギー」に満ちた子どもたちに、一打あびせられました。訪ねた教室の中の授業が全て、「これから」の中国に繋がっているような気がしました。

前庭に、パソコンを操作する子どもを挟んで、右側に木簡を持つ孔子、左側にパピルスを持つアリストテレスの3人の像が設置されていました。

「学問は、古今東西、人種を超え、年代を超え、時空を超えてなされるべき」という意味を表すのだそうです。

「その通り！」と像の肩を叩いてやりたい気分でした。

遠かった中国が、少し近くなった今回の学校視察となりました。これから私の影響がありそうです。

花鳥風月

昨年は、二〇二〇年のオリンピック・パラリンピックの開催地に東京が決定し、日本中が喜びに沸きました。日本で開催される夏のオリンピックとしては、前回（一九六四年）から約半世紀ぶりのこととなります。

一九六四年の日本はまさに高度経済成長期にありました。現在の日本を支える様々な社会インフラが整備されたのは、この時期であります。また、東京での開催はアジア初であると同時に、有色人種国家初でもあったため、多くの注目を集めました。

しかし、日本はこれ以前にも初のオリンピック招致成功を受け、幻のオリンピック（一九四〇年）開催に向け準備した事がありました。あの痛ましい日中戦争さえなければ、そこで多くの日本人選手が活躍したことでしょう。

現在は交通網が大きく発達し、日本全国どこからでも、日帰りや一泊程度で東京にアクセスできるようになりました。その点では、今度のオリンピックは、選手だけでなくみんなが参加して楽しむことができるものになりそうです。

これまでの日本の歩みを振り返り、何よりもこの平和な時代に心から感謝したいと思います。

(本多郁代)

新潟大学教育学部同窓会

第四十回同窓生の集い

研修部長 渡辺 真也

十二月十四日(土)、新潟会館にて「ギムナストラダ ～体操への道～」と題して新潟大学名誉教授(教育学部前副学部長)の滝澤かほる先生から講演をいただきました。滝澤先生は昨年度末をもって新潟大学をご退職されました。三十四年間という長年にわたり、体操を通して新潟県の教員養成に尽力されてきた方です。

一 記念講演会

(一) 開会の挨拶 安達徹会長

同窓生 回



挨拶する安達徹会長

滝澤先生は昭和四十四年にドイツのキーダインシユ体操学校をはじめスウェーデンのイドラ、マルモ、イギリスのメダウなどのヨーロッパの体操と出会い、衝撃を受けたそうです。昭和六十二年にはフィンランドのユヴァスキュラ大学の招へい教授としてお勤めになり、ヨーロッパの体操についてさらに研究を深めてきました。その後、新潟大学に戻り、ギムナストラダには一九九一年アムステルダム大会から参加し、二〇一一年第十四回ローザンヌ大会まで、六回連続で参加してきました。ワールド・ギムナストラダとは四年おきにヨーロッパ各地で開かれる競

挨拶の前に、トルコのカップパドキアで亡くなった教育学部四年生の栗原舞さんと、鶴田一雄前副学部長様に対して黙祷を捧げました。その後六十周年を記念して完成した冊子「同窓会の歴史」の紹介があり、同窓生がそれぞれ学科や地区ごとに旧交を温めることが重要であると話されました。

(二) 講演



講師の滝澤かほる先生

技性をもたないスポーツの可能性追求の場です。最近の大会では参加五十五か国、参加者は二万人以上にのぼるそうです。

長年ライフワークとしてギムナストラダにかかわってきたことで、次のようなことを強く感じ、学生に伝えてきたそうです。

- ・ 人との出会いを大切にすること
- ・ チャンスは逃がさないこと
- ・ 自分にはないもの、優れているものを見つけて、つきあうこと
- ・ 失敗しても何とかなるから大丈夫だということ
- ・ 多面的な価値、独自性、自分や人の良いところを見付けられることが大切であること



同窓生の集い

- ・ スポーツは理論と実践であること
- 一〇〇分の講演会ではとても足りないほどの資料や実際の動画を準備してくださり、充実した内容のご講演でした。

二 懇親会

(一) 祝辞

鈴木賢治教育学部長
光輝く教育学部を作っていきなりたいという強い決意発表がありました。また、光り輝く卒業生が現場で光を失わないように指導をしていただきたいという願いを述べられました。

(二) 乾杯 藤井保男顧問

(三) 懇親会

懇親会中は石川潤先生のキーボード演奏をBGMとして楽しく語り合いました。第四十回を記念する同窓生の集いは盛会のうちに幕を閉じました。

会員の広場

五十嵐を訪ねて



阿賀町立三川小学校
金子 順一

昨年の夏に高校二年の娘を連れ、新潟大学のオープンキャンパスに参加した。キャンパス内は、多くの高校生、保護者で賑わっていた。八月初めの蒸し暑い日であったが、ボランティアの大学生たちが案内や飲み物の配布などを頑張っている姿が印象的であった。説明会后、娘を連れて学生時代の宿を探してみた。現在は学生が入居している様子はなく、周囲には雑草が茂っていた。娘もその様子に驚いていた。帰りの道中、当時の生活の様子を聞かせた。トイレ、風呂、洗濯機を共用していたが、お互いに譲り合っていたこと、何か困ったことがあると声を掛け合っていたことなど。不便な中にも楽しさ、温かさがあった。暮らした三十年前と大きく変わっている。昔風の学生生活は好まれないであろう。しかし、ボランティアで汗を流す新大生を見て、人と繋がることの大切さ、楽しさを感じる心は失われていないことを頼もしく思った。

初心



小千谷市立小千谷小学校
伊藤奈津子

夏、教員免許更新のため、久しぶりに新潟大学に行きました。正直、私の心はめんどくさいなという気持ちと、講義の内容を理解しテストで合格点をとることができるのかという不安だけでした。終わった後も、十年後にまた更新しなければいけないのか、私の気力と体力は大丈夫か、そんなことばかり考えながら歩いていました。

教育学部前を通った時、入試の合格発表の時のことを思い出しました。小学生のころからの夢に一步近づいたことの嬉しさと、絶対に小学校の先生になるぞという気合いでいっぱいでした。勤務校に戻り、改めてまわりを見ました。たくさん職員がいる学校ですが、みんなキラキラ輝いています。楽しいこともそうでないこともみんな励まし合い、子どもたちの笑顔を見るために、前を向いてがんばっています。大学と勤務校を行き来し、何だか自分が恥ずかしくなってきました。子どもたちは、どんな私も「先生」と呼んでくれます。なりたくて就いた職業を続けることができていることの幸せを忘れずに、小千谷小学校の職員の皆様と一緒に輝きたいと思った夏でした。

そして父になる



新潟市立巻北小学校
大澤 雄太

大学を卒業して早七年。昨年の九月に人生の転機が訪れた。我が子の誕生である。

妻が三十時間の陣痛に耐え、我が子が誕生した瞬間は感動して込み上げてくるものがあった。我が子が全力で泣けば泣くほど、生命力の強さを感じ、うれしくて笑みがこぼれた。何だか不思議な気持ちになった。そして、初めて味わう「動いただけでうれしい」という感覚。しかし妻は言う。「せっかく寝せたのに」。

私の担任する五年生の子どもたちも同じような気持ちでこの世に迎えられるのだと思うと、子どもたちがいつもよりかわいらしく見えた。と同時に、子どもを教育していく責任の重さを感じた。特に、叱ることが苦手だった私は、その子どもに嫌われようが、子どもを正しい方向に導くために、愛情をもって叱ることが大切だと強く感じた。今年の目標は「早く退勤すること」。仕事に追われ、つい退勤が遅くなってしまうが仕事と家庭を両立させたい。我が子の子育てを通じて、人間として、教師としても成長していきたい。そして、父になるのだ。

一歩ずつ前進しよう



佐渡市立七浦小学校
名塚 裕樹

二〇一二年、冬、東京。初めてのフルマラソン。「三十キロの壁」という言葉があるように、後半に足が止まってしまった。重くて動かない。もう止めてしまいたかった。そんな時、沿道から聞こえた「がんばって！」の声。そして、小さな一歩を重ねながら、ゴールまで何とか辿り着くことができた。「私だって、三十年やって毎日悩んでいるのだから。一ヶ月二ヶ月で、全て上手くいくはずだよ」。

何事も上手くいかずに悩んでいた初任者時代に先輩から掛けてもらった言葉だ。今となれば、全くの勉強不足で子どもたちに迷惑をかけ続けた日々であったと思う。ただ、先程の言葉のように、多くの先輩方が温かい声掛けやご指導をしてくれたおかげで、なんとか一年間をやり抜くことができた。大学時代に思い描いた教師としての理想像。いきなりそこに辿り着くことはできない。今日よりも明日。少しでも力が付く授業ができることを夢見て、日々小さな一歩を重ねていきたい。同僚と支え合いながら。子どもたちと過ごす日々を楽しみながら。

学校紹介 ①

環境教育・食育を大切にした 学校づくり

五泉市立五泉南小学校

当校は、昭和三十五年(1960)に五泉小学校より分離・開校し、今年で創立五十五年目を迎えました。昭和三十六年から理科教育センターが併設され、地域の理科教育振興の中核的な役割を果たしてきました。

平成九年に校舎の大改築が行われ、それまで中庭にあった花壇、池等は撤去されましたが、平成十一年にトゲソ増殖のため、小川を改修しました。この小川をビオトープとして活用し、清水の象徴とも言われるトゲソ(トゲウオ科トミヨ属「イバラトミヨ」の五泉での俗称)の保護活動に取り組んでいます。

また、平成十八年には、五泉市ではじめての自校方式の給食実施校となり、以来食育推進の先進的な取組を行っています。

一 トゲソの保護活動

「五泉」の地名からも分かるように、五泉は水のきれいなところです。阿賀野川、早出川、能代川の扇状地にあるため地下水が豊富で、あちこちに湧水があります。しかし近年、幾分改善されたとはいえ、他の地域の例に漏れず、



市内の河川の水質は悪化しました。それまで、どの河川でも見られたトゲソをはじめとする動植物にも影響が及びました。ビオトープ

「南の泉」の設置当初は、委員会活動の一つである環境委員会が中心となつて保護活動をすすめてきましたが、総合的な学習の時間の創設に伴い現在、地域・環境学習として取り組んでいます。

三年生は、総合的な学習の時間の出発点として南の泉でトゲソの保護活動を行います。トゲソの会の支援・指導を仰ぎながら、水質検査、増えすぎたコカナダモ、ウキクサ等の除去、個体数の確認をします。この学習は、四年生以上の校区の小川、市全域の河川、その源泉となっている吉清水、胴腹清水の学習へとつながっていきます。

二 食育の取組

当校の食育のゴールは、「一人一食



分の弁当を作る事ができる」です。給食の間は、食育の中核ですが、自校方式で給食を作るため、調理員と一体となつて食育を進めることが出来ます。おにぎりレンジャー、ハッピーキャロット、生産者との交流給食など他校には見られない取組を行っています。その成果は、給食残量の減少となつて表れ、主食、主菜、副菜、汁物全てが五パーセント以下です。この取組が評価され、平成二十二年度に学校給食文部科学大臣表彰を受けました。

また、食への感謝の気持ち、そして震災記憶の風化を防ぐために、三月十一日の給食は、おにぎり二個とたくあん数枚だけの献立を実施しています。

三・一の大震災以来、環境や食への関心が高まっています。どれも、人が生きること、生存することの根幹に関わるものです。五泉の宝とも言えるトゲソの保護活動や食育の充実を通して、環境の保全と創造に貢献でき、たくましく生きる心と体をもつた子どもに育ってほしいと願っています。

(文責 小熊 進二)

平成25年度

会務報告

平成25年



4・5 入学生保護者ガイダンス (学部大講義室)

4・30 平成24年度会計監査 (新潟会館)

5・2 本部会 (新潟教育会館)

5・25 新潟大学首都圏同窓会

6・1 評議会 (新潟教育会館)

学科代表者会・支部長会

7・27 新潟大学と同窓会との懇談会 (松風会館・学生食堂)

7・30 教育新報「第165号」発行

8・28 会長・事務局会議

9・2 文科省訪問 (会長・副会長)

学校紹介

②

地域と共に歩む
明るくさわやかな学校を目指して

新潟市立上山中学校

当校は、昭和五十三年四月に鳥屋野中学校から分離・独立して三十六年目を迎えます。

校区内には新潟県庁、合同庁舎などが建ち並び、市街化と宅地開発が進んでいます。生徒数も七百人を超え、さらに増加の一途を辿っています。今後も学級数の増加が見込まれ、やがて教室が足りなくなるといふ不安もありますが、生徒数や学級数の増加は学校に勢いを与えています。

当校には、素直で協調性があり、集団としての活動意欲が高い生徒が多くいます。「さわやかな学校 上山中学校」をスローガンとし、さらに正しい言葉遣いや明るい挨拶を励行し、一人一人の良さを伸ばすことのできる、落ち着いた学校づくりを進めています。生徒会でも、「あけびお運動」と称し、「あ」(挨拶)、「け」(はじめ)、「び」(美化)、「お」(思いやり)への意識を高める活動を行っています。あいさつ運動や無言清掃、チャイム着席への取組、地域クリーン作戦、いじめ根絶集会や思いやりランチ旬間の企画・運営などがこれに当たります。これらの

活動について、毎年生徒総会で熱心に議論され、それぞれが生徒の自主的な活動として定着しています。

当校の生徒によって受け継がれているものとして象徴的なのが「上山総おどり」です。これは創立三十周年を記念して創られたものであり、現在は、他の部活動と併せて入ることのできる「総おどり部」によって受け継がれています。学校の体育祭だけでなく、新潟総おどりにおける古町や万代シテイでの演舞、上山まつり、鳥屋野まつりなど地域行事での演舞が行われます。揃いの衣装を身に着け、「オー、ソイヤッサー」



「上山大好き、上山最高!」の大きな掛け声と息の合った踊りは、地域の結びつきを深め、地域に活気を与えてくれると、保

護者・地域の皆様からも好評です。次に、当校では「地域と学校パートナーシップ事業」が充実しています。これは、新潟市教育ビジョンにおいて中心となる事業であり、三名の地域コーディネーターと共に、地域力を生かした教育活動が行われています。年間を通して、地域に緑化ボランティアを募って校地内の整備が行われています。また総合学習では、約三十ヶ所でのボランティア体験、約八十ヶ所での職場体験、約七十ヶ校への上級学校訪問を行うことができました。



さらに今年も、各自治会や自主防災会と連絡調整を図り、上山中学校での避難訓練に、各自治会の方々から参加しお話ししていただくとともに、地域の自主防災訓練に多数の生徒が参加することができました。

これからも、地域の方々とのふれ合いを大切にしながら、明るくさわやかな学校を目指してまいります。

(文責 今 範男)

9・19 学部長へ挨拶(会長・副会長)

10・5 役員会 (新潟会館)

10・26 新潟大学・全学同窓会交流会 (ANAクラウンプラザホテル新潟)

12・14 第40回同窓生の集い (新潟会館)

平成26年

1・16 教育学部教員・職員と同窓会との懇談会・懇親会 (新潟会館)

2・20 教育新報「第166号」発行

3・1 本部会 (新潟教育会館)



全学同窓会交流会の報告

広報部 佐藤 紀代子

十月二十六日(土)十五時から、ANAクラウンプラザホテル新潟を会場に平成二十五年度新潟大学・全学同窓会交流会が開催されました。下条文武大学長の開会の挨拶の後、現役の学生の就活レポートとして新潟大学経済学部四年生の前田洋平氏から「大学生活と就職活動」という演題で、約半年間にとんだ就職活動の現場の生の声をレポートしていただきました。十月の新潟大学キャリアセンター主催の各セミナーへの参加を皮切りに、四月には平日は全日面接で、夜行バスでの東京への往復を繰り返し、五月に見事、JABバンク石川県連に就職を決めました。「なぜ大学生は三年で会社をやめるのか」と言われ、一九六〇年代の二極化の時代と似ている今の時代、「四十年間働き続けた」と力強く語っていました。



次の記念講演は、昭和四十四年に新潟大学人文学部経済学科を卒業され、現在、国際大学名誉教授、他多数の取締役を兼務されている森正勝氏から「成長戦略と人材戦略」という演題で、世界における日本と他国との違いを様々な角度から、最新のデータを交えて、ご講演いただきました。シャープ等の日本企業が世界市場で敗退し、国民一人当たりのGDPランキングでも、シンガポール・香港・台湾にも遅れを取っている中、国内での人・資本・企業の動きは旧態依然としていること。しかしながら、消費者が健全な日本の環境技術は世界最高水準にあり、イギリスの調査で二年連続で、省エネ・質の高い社会の観点から「世界に貢献している国」に選ばれていること。これからの日本の成長戦略の鍵は、グローバルリーダーの育成であり、大学等の高等教育機関での人材育成の重要性を改めて考えさせられました。

全学同窓会懇親会では、新潟大学附属図書館、基礎スキー部等の十六の部活動への資金援助贈呈を行いました。来年は、全学同窓会も記念の十回目を迎えます。さらなる発展が期待されます。



同期の活動 《第28期》

三十五周年 記念同窓会 (五十五年卒)

同窓会副会長 白杵 勇人

平成二十五年十月十二日(土)新潟駅南にあるチサンホテルを会場に、昭和五十五年卒(二十八期)の三十五周年記念同窓会を開催しました。日本全国にいる同期の仲間四百四十三人に案内を出したところ、北は北海道から西は京都府までの約八十人が遠路はるばる参加してください、旧交を温めることができました。

学教育学部 55年卒業生



三十周年に引き続き、今回も新潟大学理事・副学長の生田孝至先生が県外出張先から私たちにのために

駆けつけてくださいました。本当にありがとうございました。実は、生田先生とは、昭和五十一年の入学以来、長岡分校当時から御指導、おつきあいをしていたいております。



生田先生からは、新潟大学教育学部の現状と課題について詳しくお話しいただき、各自が、自分なりに教育学部に対してできることをしようと決意を新たにしました。

さて、今回サプライズプレゼントを実施しました。新潟の地酒のプレゼントです。県外に住む同期の友は大喜びでした。

もうすぐ定年を迎える年になりましたが、二次会、三次会と盛り上がり、定年後も四十周年を実施しようという約束し最高のひとときを過ごすことができました。

教育学部との懇談会

大学と教育現場が相互理解と
交流を深めた懇談・懇親会

交流部副部長 小竹 智

一月十六日(木)、新潟市の新潟会館を会場に、新潟大学教育学部と同窓会役員との懇談会・懇親会が行われました。毎年、同窓会の交流部が企画・運営する事業で、今年度も大勢の方々にご参加いただき、相互の交流を深める有意義な会となりました。

大学側から、ご多用の中、鈴木賢治学部長様をはじめ、十五名もの教員・職員の方々からご出席をいただきました。同窓会からは、安達徹会長以下十六名が出席しました。

懇談会では、最初に安達会長から、同窓会事業への感謝の言葉があり、新採用教員や学習支援ボランティアとして活躍している学生や卒業生の現況について



安達徹会長

ての報告と大学への感謝の言葉がありました。その後、同窓会各専門部(研修・広報・組織・交流・事務局)の事業概要について報告を行いました。

鈴木学部長様と高木幸子副学部長様からは、学部の現状や課題について詳細な資料をもとに具体的に説明していただきました。



鈴木賢治学部長

近年の大きな課題である学部卒業後の就職への就職率の低さの問題も年々改善しており、採用試験合格者は、平成二十六年度は、二十二年度よりも三十八人増えている。このことは、学生が強い思いをもち、よく努力するとともに、学部においても学生向けの特別講座や小論文指導、模擬授業の指導、面接・場面指導、体育実技練

習会などの教員採用試験対策支援プログラムの実施による成果と考えられる。教育現場においても、教員になりたいと思わせる教育実習をお願いしたいという話がありました。

また、標準修業年限一年の大学院教育学研究科へたくさんの現職の先生方から入学していただき、教員としての専門的な能力と見識を身に付けていただきたいという話がありました。

後半の意見交換では、教育現場で今求められる教員の資質について協議しました。

教育現場では、さまざまな特性をもつ子どもや保護者がおり、クレーム対応や問題行動への対応のため、教員にもカウンセリングの知識や技能が必要である。大学院においては、臨床心理士を養成する講座もあるので活用をお願いしたいとの話がありました。

また、教育現場では、「即戦力」が求められているとよくいわれるが、どのような力を付ければよいのかという問いに対して、同窓会からは、子どもの立場に寄り添って、学級をまとめること、自分の足りないところを学習し、補おうとする謙虚さ、フットワークを軽くしすぐに動くこと、経験年数のある人に刺激を与えることができることなどがあげられました。学部においても受け身の姿勢から脱却し、能動的に

取り組める学生を育成したいという声がありました。

このように、白熱した話し合いが終わり、三間強同窓会副会長の挨拶で懇談会を閉じました。

懇親会では、安達会長の挨拶の後、伊藤克美副学部長様の乾杯のご発声で開演となりました。

懇談会では出された数々の課題解決への取組や大学と学校現場の双方方向での情報交換など、教育に関する尽きない課題や熱い思いを語り合いました。時間があつという間に過ぎ、時間が足りないのがとても残念でした。

高木幸子副学部長様からは、学部と同窓会のさらなる連携と発展への思いを込めて万歳をいただきました。

最後に、宮川由美子同窓会副会長より閉会の挨拶があり、学部と同窓会との一層の連携により教育力の向上を目指していくことを確認し、閉会となりました。

同窓会員の皆様には、今後も学部と同窓会に絶大なるご支援をいただきますようお願い申し上げます。



懇親会

大学のコーナー

学生との対話から

教育学部副学部長 伊藤 克美

私は理科に所属し物理を教えている。今年から小学校理科の講義の一部を担当することになった。

何かの拍子に、自然界に法則というものがあるのかどうか、という議論となった。百人以上の学生たちを少数人数に分けて議論してもらい、意見を募った。その中で、面白い発言があった。「法則って何ですか？」

「数学には定理があり、科学には法則がある、数学において正しいことと、科学において正しい、ということにどういう違いがあるのか」という問いだったようだ。もちろん、学生はこんなややこしい言葉を使ったりしないから、私がそう理解して対応したということだ。

科学において正しいこと、つまり、客観的存在としての自然の姿を認識する方法論は、帰納的論理と演繹的論理の繰り返しに依っている。そのようなことを説明したら、質問した学生が、そうだったのか、そう考えるのか、という顔をしていたのが印象に残った。講義で起こったこの対話が面白かつ

たので、遊びに来た卒業生に話してみたい。そういう理解はどこで教わるものなのだろうか、自分には記憶にない、というのがその卒業生の反応だった。確かに、こういった理解は、問題を解いたりすることだけでは到達できないと思う。

自然科学がどんな論理を駆使して、現在の理解にまで到達したのか、その方法論は、対象とする問題の難しさに依らない。最先端の科学であろうが、教室での実験であろうが、使う論理は全く同じだろう。その点の重要性をも少し考えておくべきかと思う。つまり、新しいことを理解する喜びは、何も研究者じゃないと経験できないことではない。

一九九七年に書かれた『教養』とは何か』に、著者・阿部謹也の考える教養の定義がある。「自分が社会の中でどのような位置にあり、社会のために何ができるかを知っている状態、あるいはそれを知ろうと努力している状況」を「教養」とあると言うのである。著者の提起した問題に対して、良い

答えがあるどころか、答えなくてはいけない大きな問題が積み上がってしまっているような状況にあると思う。経済も含めたグローバル化、地球環境の問題など、具体的な対策を求められている課題が山積みになっている。人類はどう生きていくのか。早晩、私たちは自分たちの選択をする必要に迫られる。私たちは考えなくてはいけない。

そういったことを考えながら、では、次世代に伝えるべき学問的な成果はなんだろうと考える。私の専門とする物理学について、何を伝えるべきだろうかと考えてみたりする。すべての人たちの教養として、物理学の膨大な成果を伝えることには無理がある。しかし、基本的な方法論と、それを援用してのいくつかの自然法則の理解くらいはできるのではないか、そんなことを考える。大学にいると、専攻する学問の影響の深さを感じさせる人に会うことも、しばしばである。学生にしても、大学の学びから受ける影響は深いものであり得る。一度抽象化された知識には汎用性があり、若い世代がこれから出会う問題の解決に活きるはずだという主張に私は同意する。私たちの仕事は、学問として抽出された人類の経験を若い世代に伝えることであると考えている。

事務局だより

事務局からお願いです

今年度初め、ある会員から、「学校会員の名前を登録する際に、自分の意見を言えるようにしてほしい。」という意見がありました。これまでも自分の意志で登録することが原則であったことは確かなのですが、幹事の方がはつきり本人に聞かずに記名した学校があったかもしれせん。大事なことなので役員会にはかり、名前の後にサインか印を付記することにしました。

ところが、毎日忙しいのに一層面倒になった所為か、「承諾者がいません」とか「該当者がいません」という回答が例年になく多く返ってきました。学校幹事の皆様の働き掛けが無ければ、ますます同窓会の会員数は先細りになってしまいます。

多くの知人や同輩の皆さんも役員として頑張ってくださいます。ご面倒でもよろしくお願いいたします。

もうすぐ平成二十五年度が終わります。しっかり締めくくり心新たに新年度を迎えたいものです。

編集後記

教育新報一六六号をお届けします。一年間、関係各位には、ご協力をいただきました。これからも、会員の皆様の声を載せていきたいと思っております。会員の情報などがありましたら、事務局までお知らせください。